

いたので、我々が復員準備が出来たのは、新郷收容所に入ってからだ。

復員は上海からだだが、昭和二十一年四月十日、佐世保に上陸し、しばらくしてから復員だった。

北支竹腰隊の一員として

富山県 本郷 金 一

私は大正十(一九二二)年六月十四日、富山市で売薬配置を業とする家の長男として生まれました。ご承知と思うが、富山の売薬は日本全国に広がる重要な産業でした。弟は大正十二年生まれで、海軍を志願しソロモン海戦で戦死しました。父は売薬配置の仕事をしていて全国を巡り、母は早死にしたので、長男である私が留守を守らなければなりません。若年であり商店に勤めておりました。小学校二年生の妹がいましたので、母の実家の祖母が留守を守ってくれていたのです。

昭和十六(一九四一)年徴集兵である私は、兵隊検査で第一乙種合格、現役となり、翌昭和十七年四月十日、富山の歩兵第六十九連隊に入営となりました。幼い妹と留守宅は祖母に頼んでの入隊でした。私の簡単な軍歴は次の通りです。

昭和十七年四月十日、富山、歩兵第六十九連隊へ入営、一期検閲後、同年六月二十八日屯営出發。

同年七月一日、宇品港出帆。同月十日、北支那河南省彰徳、河北省井陘、同永年、河南省汜水等で作戦、討伐、警備に従事。

昭和二十年八月、河南省汜水にて終戦。

昭和二十一年四月十日、佐世保上陸、復員。

一期の検閲まで、入営から二カ月余という短期間の教育でした。ところが、検閲終了後、外泊がありましたので、私等はいよいよ戦地へ出發が早いなと感じておりました。我々同期の初年兵は、北支組が先で中支が次となり、我々は北支ですから早く出發したのでした。

六月二十八日朝、富山連隊の衛門を後にして軍用列車で宇品まで、七月一日、宇品港で乗船し、釜山着、朝鮮半島は有蓋貨車で北上ですが、ほとんどが同年兵でありました。七月のことで車内は蒸し暑い毎日でしたが、数日後、本隊のある彰徳に着きました。

私の部隊は、独立混成第一旅団（通称号・島第二九六一部隊）の、独立歩兵第七十四大隊（島第二九六四部隊）で第三中隊へ配属になりました。内地での初年兵教育はわずか二カ月間であったので、もう一度、現地での初年兵教育が実施され、それから戦地での討伐、作戦、警備等に参加することになりました。

私の所属した第三中隊長は、竹腰克己中尉でありました。隊史によりますと、昭和十六年十二月、前隊長の田中隊長が夜間討伐中、腰部貫通銃創を負い後送されたので、本部情報将校の竹腰中尉が第四代目中隊長となられたと書かれていますから、私達初年兵は、中隊長就任後の初めての初年兵であったかもしれせん。

また、昭和十六年十二月、大東亜戦勃発、その半年後という戦意が盛んな時の入隊でした。従って、中隊史にあるように、竹腰隊は敵第四十軍への守りを固めるため全員の士気昂揚に努め「最大の防衛は攻撃である」との合言葉のもと、高度の分散配備、経済封鎖の実施、不断の討伐粛正による治安確保に努めながら、敵地区との交通遮断のため一連のトーチカ建設を強行しました。

この間、「執拗な敵の妨害を排除しながら、短時間のうちに地区住民や区長等の資材、労力の提供に数個所のトーチカを完成し、敵に対し大いなる脅威を与え北方第二中隊との防衛線を確保した……」。とありますから、住民とも協力しながら、八路军からの攻撃に備えていました。こういうことは、その後、終戦までの討伐、戦闘で実感していました。そのため少数の兵力で、広範な北支軍の占領区を守っていたのでした。

次に、林県討伐について話をします。友軍機が「通信筒」を落として行きました。山の中の討伐ですか

ら、現地には食料がほとんど無くなりました。そのため、民家に置き去りにしてあった粟粥のようなものを食べました。飲み水が無いから携帯の乾パンを食べてものを通らない。唾液一つすら出ない。何しろ、大山脈の中で、山また山であり、また裏側が山西省の山から山です。

飛行機から食料を投下してくれたこともありませんが、私はその食料にもありつけませんでした。兵隊は皆、餓鬼のようになっていました。携帯した米は幾らかあったが水が無いので炊くことが出来ない。そのうち、川の泥水を見つけ、それをろ過して米を炊いたのですが、米も水も少ないのですから、一人飯盒のふた一杯の飯にありつけましたが、まさに疲労困憊そのものでありました。

我々独立歩兵大隊は作戦要員ですが補給はあまり無い。現地調達、自給自足ということが多く、師団のように輜重隊も無く、作戦となると独立歩兵大隊は使われました。特に、我が独立歩第七十四大隊、その中でも第三中隊は単独、別行動が多く、独立任務を持たされ

ていました。

第三中隊は、大隊の中でも戦闘中隊でした。分遣されて、任務を与えられ、いつも状況の悪い所（戦闘困難、危険度の高い所、本隊と離れている所）に使われました。しかし、逆に「水治鎮」では、他中隊は状況は良いと言われていたのに、強力な敵との戦闘、襲撃を受け全滅をしました。我々はおえって命拾いをしたこともありました。

戦地へ来た初年兵の教育は、実戦経験の多い竹腰隊が全部やっていました。そのため、今でも懐かしい思い出「困難な、苦しい体験」の多い竹腰隊の戦友会は団結しています。

竹腰隊長は厳しいが、中国の住民が大飢饉で苦しんでいる時、馬糧ではあるが、農民達に支給し助けたこともありました。当時、その付近は干ばつで作物が収穫出来ず、かわいそうでした。子供が、兵隊の飯盒の洗い水の中から飯粒を集めて食べていました。本当にかわいそうでした。

そのようなことから、竹腰隊には農民も随分感謝していたようです。水治鎮地区の治安が良くなったと言います。戦後二十年たち、戦友が水治鎮を訪ねた時、当時、十五歳くらいであった子供が局長になっていたという。その人がいろいろ案内をしてくれ、当時のこと（飢餓の事など）を話し、感謝してくれていたと言います。

その後、昭和十九年になると、北支軍も南方や他地区に転出したり、湘桂・河南作戦等が実施されたため、新しい部隊の編成がなされたり、警備地区が変わったりしました。また、満州方面も手薄となってきたためか、関東軍への転出などがありました。

そのため、我々の独混第一旅団も編成が変わり、我が竹腰中隊も中隊ごと、新編成の独立歩兵第二旅団へ転属の命令がありました。

隊史によれば、第二旅団曙兵団への転属という見出しで大要次の如く書かれています。

「永年地区に数カ月駐留した竹腰隊は昭和十九年一月、命により中隊長以下、中隊全員石門において新編

される、独立歩兵第二旅団（曙第一四五二部隊）編成要員として石門に集結。独立歩兵第一九六大隊（曙一四五五）大隊長中野寿一陸軍中佐、大隊本部河北省井陘県井陘炭鉱内の第三中隊として炭鉱北方数キロの敵性の一寒村賈荘に中隊本部を置きました。北方の山間部の数個所の第一線トーチカに分散配備の態勢を整え、炭鉱防衛の重大任務に就きこれを完遂しました」とあります。

しかし、警備隊は手薄になり、犠牲も出て兵力は少なくなる。その少ない所へ八路军は情報を知って襲撃してくる。また農民も情報を八路军に知らせていたようです。守備隊は井陘炭鉱を守る任務もあつたのですが、炭鉱には日本人も多く働いていました。以前、日本人が殺されてしまったこともあるから、邦人も守らねばならない。そのうちに戦車攻撃の訓練も始まりました。そして、毎日毎日、銃、砲声がしていました。

我が隊はまたまた、河南作戦後、鄭州周辺で新しく

編成された至毅兵団要員として、昭和二十年三月、全員鄭州に移動、至毅第一五九部隊の先任第三中隊となります。中隊本部を汜水に置き、分遣隊を栄陽県城内と崔届にそれぞれ配置し、鄭州と洛陽間の鉄道・軍通信係の確保、周辺地区の治安維持のため肅正行動を活発に行いました。

その頃、我が鉄道交通網攪乱のため重慶方面からの米軍機が毎日飛来し、北支の鉄道交通は昼間は避難し、夜間細々と局地的に運行する程度で、幹線の機能は喪失している状態でした。しかも、沖繩には米軍が上陸し激戦中との情報でした。

我が中隊は他隊より一部増強を得て、昭和二十年六月十八日、二十数キロ奥の敵根拠地、瑠璃廟溝の夜襲を計画し、企図を秘匿し日没後基地を出発する。暗夜地図を頼りに前進を続けたが、迫撃砲の駄馬等の前進が渋滞して意の如くならず、敵根拠地への攻撃開始は払暁となりました。

不意を突かれた敵は部落内を周章狼狽して、ただ銃を手にして隊列もなく我が目前を遁走してゆく有様で

した。速やかに部落掃討を終えた我が討伐隊は、持ち切れぬ程の兵器を鹵獲し、付近の部落に分散密集する敵大軍の反抗を予期し、急ぎ撤退するよう周辺高地占領中の各隊に連絡するのに時間を要しました。中隊は丘陵地で集結を待ったが、時間経過と共に敵の攻撃は熾烈となり、迫撃砲弾の弾着も緊迫してきました。

集結態勢を整え、撤退を開始しましたが、地理に詳しい敵の追撃は急となり、我が後衛隊は悲愴な戦闘により尊い犠牲を出し、遺憾ながらその遺体の収容も不可能という最悪の状態のまま基地に引き揚げねばなりませんでした。

大隊本部は、我々が玉碎したのではないかと応援に来ました。数日後、大隊で討伐隊を編成し、遺体収容を完了しました。この戦闘により敵は不意を突かれ大打撃を受けましたが、我が軍も尊い犠牲を強いられる結果となってしまいました。

八路軍は、我が兵力が少なくなったのを知ると攻撃するので、六月の暑い日の河南作戦の時を思い出

します。我が軍の兵力が少ないので、八路軍はラッパを吹いて包囲してきました。小隊、分隊等少数の隊は全滅するものもあり、北支の戦いも、河南作戦以後は敵の兵力も多くなり、我が軍の損害が多くなったように思います。

中隊の汜水駐留はわずか五カ月で終戦を迎えることとなりましたが、終戦直前の八月十日前（ソ連参戦頃）、ポツダム宣言による我が国の無条件降伏の情報（頃）が、ソ連や重慶政府から中国全土に流布されるまで、我が軍に協力的だった汪政府系機関も浮き足立ち、保安隊も敵側に寝返るようになりました。

日本軍の無条件降伏を知った八路軍は、我が軍の兵器を蒋介石軍に渡さぬよう攻撃を開始し、国・共紛争が表面に出て、北支の蒋介石国府軍は、戦後日本軍を中共軍討伐に使用もしています。

八月十七日には、まだ進入したことのない、我が軍の栄陽県の城壁を突破し、我が警備隊の至近まで攻め入り、周辺の民家屋上から包囲、銃撃を加えました

が、我が軍の反撃により、幾人かの遺体を残し敗走しました。

その戦闘で、我が竹腰中隊長は警備隊望楼上で戦闘指揮中、左肩から背中に貫通銃創を受けました。その後、中隊長は鄭州・済南の陸軍病院に後送されました。そのため、岡田中尉が中隊の指揮をしました。

分遣隊の撤収、新郷の集中営への集結、同地で数カ月間にわたる抑留期間を経て、昭和二十一年四月六日、上海から乗船、同九日佐世保に上陸、復員して、私も故郷へ帰ることが出来、今日に至っております。

北支で兄と会う

埼玉県 斉藤 広一

私の生家は農家で、茶と麦を作っていました。家族は両親と五男三女の十人で、長兄は家業、次兄は海軍中尉、三男は召集で満州に、四男は衛生兵で中国に出征、私は五男です。それから住み込みの農業手伝いの